

村人と童話のような体験

ケンバの大晦日③



橋本白道

佐賀県生まれ。京都で陶芸と出会い、備

前で修業後、故郷に窯を開いた。スウェーデンやリトアニア、ドミニカ共和国に滞在し、ドキュメンタリー映画や陶芸学校づくり挑戦した。2007年、美郷町上野の空き家に、リトアニア出身の陶芸家ベアトリ・チェさんと夫婦で移住し陶芸工房を開いた。

隣人にケンバと助けを求めた。台湾の松下電器で取締役として陣頭指揮した吉田さんである。台北の歓楽街で鍛えたらしい中国語は流暢だし英語にも果敢に挑む。トラブルを持ち込むたびに「困ったやつや！」などと言いながら喜々として解決してくれる。

玄関の鍵をなくして吹雪の中を2階から忍び込むうとして断念した状況を話したら、吉田さんはテキパキと電話を入れ、加田の湯で落ちていた鍵を探し当てた。吉田さん夫婦に凍ったケンバを預け、暗い雪道を急いだ。

どうにか家の鍵は手に入れたが、除夜の鐘をつきに行く時間が迫っていた。温泉で温まった体もすっかり冷えてしまった。お寺では熱いおでんとお酒が出るらしい。「除夜の鐘をつき悪霊を祓わねば、来年は悪い年になるよ」と脅してケンバを連れていった。吉田さんのお宅でごちそうを食べて、それほど経っていないの

に、ケンバは村人が勧めるままに何度もおでんをお替わりした。この食欲がこの体を作っているのだなど納得した。否、断りきれない優しい性格のせいかもしれなかった。

村人たちと紙コップ酒を酌み交わし、素朴な鐘の音と共に飛び去ってゆく悪霊たちを想像していた。

ケンバは、かねての計画どおり美郷に2泊ほどして広島へ向かった。横浜に帰った後、短いメールをくれたが、そのあと連絡は途絶えた。

大きな川に抱かれた山奥の小さな村での童話のような体験は、彼女にとって現実とは思えないほど強烈なものだったようだ。吹雪の中で脚立を支えた凍える手の感触を噛みしめる時間が必要なのだろう。

次の年の大晦日にケンバは日本にいなかった。バハマへ帰国したのである。